



バラ随想

原 秀 雄

録などの記載を引いて記され、また白井光太郎博士の日本園芸史(本草学論攷第三冊、昭和九年)には、他の多くの園芸植物と共に多くのバラの記述があり、同博士の樹木和名考(昭和八年)も同様である。

バラ属の植物は北海道の高山帯に

見るオオタカネバラ、本州の高山帯にあるその変種のタカネイバラ(ミヤマハマナス)

各地の山野至る所に白い花を咲くノイバラ(ノバラ)海浜の砂地に群生して、紅葉花を晩春から秋まで絶えず開くハマナス(正しくはハマナシ訛つてハマナス、今はそれが通名となつた)などと、名を挙げれば日本植物総覧に日本自生の種凡そ十五、変種その他凡そ十位の記載があり、その若干の栽培品も載せてある。バラといえは今日ではバラ科のバラ属全体の総名となつた形であるが古くはウマラ、ウバラ、ムバラ(無波

バラの花が今日の様に一般にもてはやされ、また方々の庭などに植えられる様になつたにはいろいろの原因もあるが、要するに極めて変化に富み、且つ初夏から秋に至るまで、花を咲きつづけるものもある上に、芳香に富み、その栽培も特別に難かしいという程のこともないのによるものである。ここにいささかの暇をみてバラについての文献をいろいろ覗いてみたが、得たところを記すのも、あながちむだごとでもあるまいと、貴重な紙面に閑文字をつらねることを許していただくこととした。

先ず古事類苑(明治四十四年)には古文献の記載を輯めてあるが、バラに関する記はあまり見当たらない。宮沢文吾博士の花木園芸(昭和十五年)にはハマナス、モクコウバラ、ナニワイバラ、サンショウイバラ、イザヨイバラなどについて、花譜、大和本草、和漢三才図会、広博物誌、花葉、古名

澄(寛政三(一七九二)―安政五(一八五八)年)の万葉集品物図絵上の巻には、ノイバラの絵に添えてこの一首が万葉仮名で記され、その絵の上に『うまら又うばら野薔薇の事』と記してある。そして野薔薇に『ヌイハラ』と振仮名が施してある。イ・ウ・ムまたノ・ヌは相通ずる。万葉の宇万良の歌には『道の辺の宇万良』とあるからには、道のほとりなどによく見る今のノバラをさしたものと思われる。

バラを薔薇の音で記したのは古今和歌集第十物名にある紀貫之の和歌にある『我はけさうひにぞみつる花の色をあだなる物といふべかりけり』というのが最も古いとされている。サウビはショウビ薔薇であり、その頃大陸から伝えられたバラはボサツバラ(ゴヤバラ)の類であろうというが、詳らかでない。

和名抄には『宮実、薔薇子、和名無波良乃美』とあり、この無波良は今のノイバラで、その実を宮実と称え、菓として用いている。

降つて元禄八(一六九五)年上梓の花壇地錦抄には、十二種のバラが載せてあり、全文をここに転載すると次の通りである。

荆棘(イバラ)のるひ

はまなす 花こいむらさきひとへ大りんらうざ 花さくらいろに見ゆ八重ひとへ大りんらうざはまなすは薬種に用長春 こいむらさき中りん八重赤キヤウに

見ゆ四季ともに花さく

白長春 八重白四季に花咲校色に見ゆる
猩々長春 くれなひひとへ四季ニ花さく

放後という言葉であつた。それ程多くの人民(彼等は自分等の複数を人民という)は現代の共産国「中国」を謳歌している。

しかしその反面、土地の所有権がなくなつて、それに対する分配がなくなり、労働収入だけになつた中小地主や、家族が多く労働力の少ないために生活に苦しんでより農民も決して暮くはない。一は今までも働いても収入は少なくなるし、一は働いても働いても生活は苦しい。更に土地改革の犠牲になつて生命を墜した地主富豪の数も決して少なくはないし、それらのもの遺族は何等の補償もなく、処刑を免れた地主でさえ今なお合作社へ入ることを許されていないから必ずしも一〇〇%の農民が現代を謳歌しているとは考えられない。けれども昔から中国には「天の命あまのまこれ革る」という国民性が培われている。たとえ時勢に対する恐慫おく能わざるものがあつても、力及ばざれば唯々として何事も無いもののように、たんたんと生活を続けて行ける強靱性がある。これらのものはどの程度に雌伏しているか窺うすべもないが、帰途香港で、毎日四百人位ずつの脱走者があり、合作社では暮しが立たないといつて、集団経営共同闘争の世界から逃げ出して来るといふ話を聞いた。これは決して巷間の風説ではない。責任ある立場にある現地の友人から親しくきいた話であるが、ただ脱走者のいうことが、どこまで真実であるかは保証の限りでない。また農民のみならず都市の商工業者が、公私合併になり、五年七年あるいは十二年の区別があつても、その期間を過ぎると従来の資産(設備、商品等)に対する配当がなくなり(年五%宛)全額補償を受けないうちに国有になつてしまひ、丁度中小地主が土地の所有権を失つたのと同様の結

はと荆 八重一とへあり白中りん
牡丹荆 紫八重大りん
ちやうせん荆 白大りん花形つばきのごと
し

ごや荆 八重中りんうす赤
山柘荆 うす紫八重中りん葉さんせうのご
とし

箱根荆 白大りんひとへ

唐荆 白八重大りんなるほどせんやうなり
花形ふさのごとし青きはど白し

荆茨(サルトリイバラ) 花形藤のごとく
色うこん上々(註これはユリ科植物)

さて蛇足であるがこれに註をつけること
にした。

はまなすは日本海岸では鳥取県太平洋岸
では茨城県以北、北海道の海浜各地に自生
のハマナシ(訛つてハマナス) *Rosa rugosa*

Thunb. である。茎に刺を密生、花紅紫一
重、大輪、晩春より秋まで次々と咲き、赤
い実も美しく、食べて味がよく、ピタミンC
に富むといわれる。葉に縮みが多く、花は
香りが高い。庭に植えて甚だ強く、よく開
花するので、古くから人に親しまれたもの
であろう。大和本草には玫瑰花ハマナスと
して資暇録の記を引き、園史、名花譜、陳
眉公秘笈、漳州府志を引いて、種々の記が
ある。『筑紫にて花たち花と云』とあるが、
筑紫にハマナスの自生はないから、この名
のあることはどうであろうか。この大和本
草には形態を記した後に植栽の法を色々
と述べ、『傍の新枝を早く分ち植されは本木
枯るよしいへり比花香色ともによし樹下に
宜からず北野に白花あり』などと記してあ
る。玫瑰は正しくハマナスと異なるが、古く

は誤つてこれをハマナスとした。
長春はコウシンバラ(月季花) 即ちシキ
ザキイバラ *R. chinensis* Jacq. いわゆる
チャイナローズ *China Rose* で常緑灌木、
年中花ありとて長春といひ、またコウシン
バラは庚申バラ、元は庚申花で、庚申は一月
おきにあるが、ここでは四季の意である。
チョウシュン即ち長春は、漢名の長春花に
由来する。大和本草に『春花尤もよし八重
の紅花なり、又月月紅と云』の記文がある。
藤原定家の明月記に建曆三(一一二二)年
十二月十六日籬下長春花猶有紅蕊云々とあ
るのを初めとするという。中華の原産。
白長春は長春(単弁、重弁、紅葉、薄紅)
の白花品というほどのもので、桜色に見ゆ
るとあるのは、或は長春の薄紅のものをい
うか。
狸々長春は色の濃い花を咲くものである
。とは荆は四国、九州に自生もあり、家植も
ある常緑藤本様の灌木で、白一重の花を単
生するナニワイバラ *R. laevigata* Michx.
の一品で、薄紅の花を開くハトヤバラ *R.*
rosa Mak. et Nann. のことだ、地錦抄に
白中りんとあるのはハトヤバラよりも、ナ
ニワイバラを指しおるものと考ええる。ナ
ニワイバラは難波バラで、『多分往時大阪
ノ植木屋ヨリ世ニ弘リントテ斯克云フナラ
ン』と牧野日本植物図鑑に見える。地錦抄
に『八重一とへ』とあるが、八重は誤りで
あるう。大和本草には正しく『イハラの花
紅にして単なり』とあり、次で『又白花あ
りササン花イハラと云』とある。サザンカ
イハラはナニワイバラである。またナニワ

イハラについては、同じ書に別に記文があ
る。

牡丹荆は今のボタンバラ *R. odorata*
Sw. か。しするとこれはシナ西部の原産
で、いわゆるティー・ローズ *Tea Rose* で
ある。そしてこれはジョセフ・パンクス
Joseph Banks が、一七八九年シナから英
国に桃色のものを持帰つたのが本種が欧州
に伝わつた初めとされるが、これは枯れて
更に薄紅のものが一八〇九年に英国に再伝
し、更に一八二四年黄花のものが伝わつて、
いわゆるティー・ローズ、更に今日のハイ
ブリッド・ティー・ローズ *Hybrid Tea*
Rose の基を築いたが、わが国では英国よ
り伝来がずつと古いことになる。大和本草
には『花大に紅なる事常のイハラにすくれ
たり小牡丹の如し八重なり三四月開甚可
賞』とある。大和本草にはハマナス、ボサ
ツイバラ、ハトヤバラ、カウシンバラ、ナ
ニハイバラ、ボクツイバラ、ノイバラ、ラ
ウザイバラを記し、同じ著者(貝原益軒)
の花譜には薔薇、月季花、玫瑰花、線絲花
をあげてある。

ごや荆はムラサキゴヤバラ *R. Thoryi*
Tratt. の変種今のゴヤバラ一名ボサツバ
ラ *var. conea* Nakai で、大和本草に薔
薇ボサツイバラとして、『花紅に八重にし
て牆にはふ事一二丈なるあり(中略) 是真
薔薇なり其花色新に開は淡紅なり久を経て
深紅色なり又初より後まで淡紅なるあり〇
八重の紅花なり又白き八重にして微紅をお
ふるあり最好し品類多し』(下略)とある。
山柘荆はサンシヨウイバラ一名サンシヨ
ウバラ *R. microphylla* Roxb. *var. hirtula*

果となるので、これらのものは果してどん
な考えをもつていられるものか農民以上に何か
割り切れないものを持つていられるのではある
まいか? この辺のところはまことに微妙
ではあるが、絶対多数の農民、労働者が開
放を喜んでいられることには間違いないとお
もう。

これに反してソ連の農村は全く対照的
であり正反対である。食糧の供出は強奪であ
り、コルホーズの内面は政府に対する怨嗟
の声に満ちている。私は友人からラゲー
ル生活で実際に体験したという話をき
いたが、シベリアのある部落ではお婆さんが、
食糧を入れた袋をかきつけて泣きながら歩
いている。供出を強制されて食糧を運んで行
くところで、これを出してしまえばもう家
には残つていられる食物が無いといつて泣く。
それでも供出を制強されるのである。また
モスクワ郊外で、馬鈴薯掘りに駆使された
時、掘取機の爪を浅くせよという、しかし
浅くすれば薯が畑に残ることは当然だから
かまわず深くして底まで掘つた。ところが
ひどく叱られて浅くするように命令され
た。聞いただけでは理解に苦しむでしょう
が、彼等は浅掘り分を収穫高として供出し
残りの分は自家用、販売用として胡魔化し
ている。ここにソ連の暗さがあるというこ
とであつた。

また一昨年、同様にソ連に抑留された將
校達が帰還したが、そのうちの某將官は、
月刊誌「大陸問題」に次のようにコルホー
ズの実態を公表している。

私のいたところでは、トラクターステー
ションの農具が(動力農具)不足している
ために(コルホーズの農具は国営のトラク
ターステーションから行く)小麦の収穫が
遅れてしまつた。いくら催促してもコンバ

ウバラ *R. microphylla* Roxb. *var. hirtula*

は誤つてこれをハマナスとした。
長春はコウシンバラ(月季花) 即ちシキ
ザキイバラ *R. chinensis* Jacq. いわゆる
チャイナローズ *China Rose* で常緑灌木、
年中花ありとて長春といひ、またコウシン
バラは庚申バラ、元は庚申花で、庚申は一月
おきにあるが、ここでは四季の意である。
チョウシュン即ち長春は、漢名の長春花に
由来する。大和本草に『春花尤もよし八重
の紅花なり、又月月紅と云』の記文がある。
藤原定家の明月記に建曆三(一一二二)年
十二月十六日籬下長春花猶有紅蕊云々とあ
るのを初めとするという。中華の原産。
白長春は長春(単弁、重弁、紅葉、薄紅)
の白花品というほどのもので、桜色に見ゆ
るとあるのは、或は長春の薄紅のものをい
うか。
狸々長春は色の濃い花を咲くものである
。とは荆は四国、九州に自生もあり、家植も
ある常緑藤本様の灌木で、白一重の花を単
生するナニワイバラ *R. laevigata* Michx.
の一品で、薄紅の花を開くハトヤバラ *R.*
rosa Mak. et Nann. のことだ、地錦抄に
白中りんとあるのはハトヤバラよりも、ナ
ニワイバラを指しおるものと考ええる。ナ
ニワイバラは難波バラで、『多分往時大阪
ノ植木屋ヨリ世ニ弘リントテ斯克云フナラ
ン』と牧野日本植物図鑑に見える。地錦抄
に『八重一とへ』とあるが、八重は誤りで
あるう。大和本草には正しく『イハラの花
紅にして単なり』とあり、次で『又白花あ
りササン花イハラと云』とある。サザンカ
イハラはナニワイバラである。またナニワ

イハラはナニワイバラである。またナニワ

Regal は、葉が山椒、即ちサンショウのそれに似るといのでこの名があり、物品識名、草木育種などに記され、花は一重、この品のシナ原産のものにイザヨイバラ一名ヤエノサンショウバラ var. glabra Regal があり、本草名備考和訓鈔に『花深紅千葉にして全く開かず一方の欠あり故に又イザヨヒバラと云』とあると、白井博士の樹本和名考にある。本草名備考の記文は前文に『サンセウバラ薔薇一種葉の形山椒に似て』とあるから、これでは一重のサンショウバラと八重のイザヨイバラとの記文が重なり合つて居る。

箱根荆は箱根あたりに野生するバラか。大和本草に『箱根イバラ比単葉なり』とあり単葉は一重咲のことである。らうぎは大和本草のロウザイバラ、物品目録のオランダイバラで、花譜に『縹絲花(をらんだいばら)連生八錢云。花葉玫瑰花に似て色うす紫なり。香なし。枝にはりあり。比花はるる紅夷(をらんだ)より来る故に名づく』とある。

ちやうせん荆、唐荆はいかなる品か。和漢三才図会是一種の百科事典であるが、その九十六卷蔓草類にバラ六種、それぞれに形態、効用の記載とともに図がある。しやうび(薔薇今のノイバラ) 仏見笑(ぼたんいばら) 茶麩花(こやをき、古也乎岐) 月季花(ちやうしゆん、長春) 玫瑰花(はまなす、波末奈須) おらんだいばらがそれで、イバラ即ちノイバラの実を営実ということについては『子を結び簇をなして生ず營星の如く然り故にこれを営実と謂う』漢文)とある。白井博士の樹本和名考にはイ

バラ(茨、薔薇) ハトヤバラ、ハマナス(浜梨) ハヒバラ(這茨)、ニホヒバラ(香バラ) ボタンイバラ、ボサツイバラ(苦薩イバラ) オランダイバラ、カイドウバラ(海棠バラ) カカヤンバラ、カウシンバラ、タカネバラ(高嶺バラ) ナニハイバラ、ノイバラ、テリハノイバラ、サザンクワイバラ、サンセウバラの各種にわたり、古い文献の記載がのべてあり、興味深い、ここには一々にして記すことを略す。

バラ属の植物は野生のもの、渡来のもの共に人々にめでられ、殊に渡来品は貴重視されたものであろう。然し概ね一部好事家の庭に植栽されるに止まつたが、今日のように一般に栽植されるようになったのは、明治の初め、開拓使が欧米より各種の花卉、果樹、蔬菜その他農林植物の種苗を輸入配布したのにはじまる。即ち初め一季咲、四季咲のもの合せて凡そ三十数品を輸入、接木などにより苗木を育て、その保存と共に松下げを行つたが、在来のバラと異なり一段と花も美しく、香りも高かつたので、わが国の人達には驚歎すべきものであつたに相違ない。明治十年頃から十七、八年頃には次第に流行して、業者等により薔薇花集が発行された。明治十六(一八八三)年発行のものには、白黄、虎の洞、大山吹、泰山白、天地開など六十余品が盛られている。ここに記した天地開とは、一八六七年発表されたハイブリッド・ティー最初の品種といわれるラ・フランスであり、その他何れも外来の品種で、みなその名を邦名に改められている。——一九五八・一月稿——

北大助教授・植物園勤務)

新規 会員募集!

雪たね同友会

雑誌「牧草と園芸」は勿論既に会員になられた方々から大変な好評を博して居ります。今が入会の絶好期です。直ちに御入会下さい。

○会員の特長

- ・各種、種子苗木球根を小売価格の一割引いたします。(会員の方は予め割引いて御送金下さい)
- ・毎月一回「牧草と園芸」を送ります。
- ・御注文の額に依り新品種その他のお奨め出来る作物種子の試用小袋を進呈します。
- ・酪農及び園芸に関する御相談に応じます。
- ・農場見学、技術指導が受けられます。
- ・そのほか適時サービスを行います。

○入会手続

- ・雪たね同友会は誰方でも入会できます。
- ・入会御希望の方は会費(一力年分二百円)を添えて御申込下さい。
- ・会費が入金になると会員名簿に登録し「牧草と園芸」及び会員番号を附した会員証を送ります。
- ・会費が切れますと会員の資格がなくなりますからそのとき次年度の会費を御送金下さい。

イン(収穫用動力農具)が来ない。しかし広漠たる大農場のことであるから、手刈りなど思いもよらず、手を拱いてコンバインの来るのを待つているのだが、それがなかなかやって来ない。漸く来たと思つたら、完全な刈取りをしないで点々と虎刈りにして帰つてしまふ。コンバインの運転手はノルマを上げるのが大切だから収穫量よりはノルマの方が重点で、甚しいのは雪が来ても刈取りが出来ないで、せつかく突つた小麦が雪の下になつて倒伏してしまつた。実に勿体ないことであるとおもう、しかも損耗はそればかりでない。包装資材がないので脱穀した小麦をバラでトラックで運ぶ。トラックの運転手もまたコンバイン同様ノルマであるから、悪路をおかまいなしにフツ飛ばす。車上の小麦は飛んで路上に散乱するといふ始末で、近所のものは先を争つてこれを拾う。私(筆者)はその村の名を失念してしまつたが、雪村では、主人が一年働いて受取つたノルマよりも、妻君が一日の間に路上で拾つた小麦の方が多かつたという笑話以上の実話もある。

このような有様で、共産化四十年にして尙且つ昔の帝政時代を回顧して、懐しがつている農民もあるといふことは、いくら人工衛星を飛ばして科学の進歩を誇るとも、一面には食にも飢ゆる農民があつて、怨嗟の声を放つているようでは、例えホルホーグについて理論はたつても実際のホルホーグ農民は、決して幸福とはいへない。この点、中国の農業合作社運動は、一応成功の途上にあるものとおもわれる。

(雪印種苗・取締役社長)

註 筆者は中国農学会の招聘をうけて、昨年の六月二十五日より七月末までの約一カ月間中国農業事情を視察した。